京都春期特別集会祈祷会
タビタ、起きよ
使徒行伝第９章32～43節

１９７５年５月５日
小池辰雄

キリスト神秘　「タビタ、起きよ」　霊動　使徒的信仰　祈り

【使徒９】

32ペテロは偏く四方をめぐりてルダに住む聖徒の許にいたり、33彼処にてアイネヤという人の中風を患いて八年のあいだ床に臥し居るに遇う。34かくてペテロ之に『アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医したもう、起きて床を収めよ』と言いたれば、直ちに起きたり。35ここにルダ及びサロンに住む者みな之を見て主に帰依せり。

36ヨッパにタビタと云う女の弟子あり、その名を訳すればドルカスなり。此の女は、ひたすら善き業と施済とをなせり。37彼そのころ病みて死にたれば、之を洗いて高楼に置く。38ルダはヨッパに近ければ、弟子たちペテロの彼処に居るを聞きて、二人の者を遣し『ためらわで我らに来れ』と請わしむ。39ペテロ起ちてともに往き、遂に到れば、彼を高楼に伴れてのぼりしに、寡婦らみな之をかこみて泣きつつ、ドルカスが偕に居りしほどに製りし下衣・上衣を見せたり。40ペテロ彼等をみな外に出し、跪づきて祈りし後、ふりかえり屍体に向かいて『タビタ、起きよ』と言いたれば、かれ目を開き、ペテロを見て起反れり。41ペテロ手をあたえ、起こして聖徒と寡婦とを呼び、タビタを活きたるままにて見す。42この事ヨッパ中に知られたれば、多くの人、主を信じたり。43ペテロ皮工シモンの家にありて日久しくヨッパに留まれり。

●キリスト神秘

32ペテロは偏く四方をめぐりてルダに住む聖徒の許にいたり、33彼処にてアイネヤという人の中風を患いて八年のあいだ床に臥し居るに遇う。34かくてペテロ之に『アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医したもう、起きて床を収めよ』と言いたれば、直ちに起きたり。

まぁ、こういう一句を読みますと、先に進めなくなる。何という素晴らしい現実だろうと思う。

「イエス・キリスト汝を医したまえ」
ではないんです。
「**イエス・キリスト汝を医(いや)したもう**」
です。これは不定過去現在形で書いてあって、
「今直ちに癒したもう」
というわけです。確信をもって言っている。信仰の世界は、
「信即現」
と私は申します。信は即ち、現(うつつ)である。いつも直々(じかじか)に、私たちがお互いに顔を見ているよりももっと凄く、キリストの現在をそこに見なくてはいかん。
「キリストが共にある」
ということは、ただ観念していては、「共にある」ではない。本当に今現在、私たちと共にここに居たもうと霊の眼をもってキリストを見奉る。ただ霊視するという人もあるでしょうけれども、本当に霊の眼をもって視るということは、存在的に本当にキリストがそこに在るということを信ずるということと視るということが一つなんです。そういうような「共にある」ということです。ヨハネ伝の中に、聖霊が「共にある」ということと、
「中に在る」
ということの、二つの言葉が使ってある。
「キリストが共にある」
ということと同時に、
「キリストが御霊として私たちの中に在りたもう」
このことが一つである現実であるから、ペテロはこれが言えたんです。
「**アイネヤよ、イエス・キリストは汝を癒したもう**」
と言うときには、御霊のキリストがペテロの中にあり、またこのイエスが本当に現在そこに在りたもう。この二つの事態が一つになっているわけです。こういう神秘がキリスト神秘という世界です。これは使徒たちが本当にそれを身をもって体験していたから、体現したんです。
それで、この使徒行伝はそのようなことで、私たちクリスチャンは、使徒行伝の続編をみずから編んでいく。そういうのが本当にクリスチャンの在り方であります。どうか、私たちはそのようにしてこの現実を本当に私たち自身の現実として行きましょう。
私たちはただ癒しのことを言っているのではない。生活一切のことにおいてこのような力ある現実をもって進んで行く。もはや、行き詰まりを知らん。自分が行き詰まれば、豁然として行き詰まらないところに来る。私たちはもう絶望ということがない。むしろ、
「自分に絶望するから本当の希望がそこに現在する」
と言っても、逆説的に言えるところです。

ウェスレーのお母さんが、

「本当に今晩聞いてくださるまでは、私はこの祈りをやめません」

と言って、祈りかかった。そこで、遠くにいた子ども（ウェスレー）にその晩、変化が起きた。そういうことで、私たちの一番力強いものは、この祈りの世界の力です。祈りは同時に即、愛です。このような愛の祈り、これは一切に勝つ。これでいきます。

●「タビタ、起きよ」

34かくてペテロ之に『アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医したもう、起きて床を収めよ』と言いたれば、直ちに起きたり。35ここにルダ及びサロンに住む者みな之を見て主に帰依せり。

この「帰依」は正に「南無」です。

36ヨッパにタビタと云う女の弟子あり、その名を訳すればドルカスなり。

カモシカという意味です。

此の女は、ひたすら善き業と施済とをなせり。37彼そのころ病みて死にたれば、之を洗いて高楼に置く。38ルダはヨッパに近ければ、弟子たちペテロの彼処に居るを聞きて、二人の者を遣し『ためらわで我らに来れ』と請わしむ。39ペテロ起ちてともに往き、遂に到れば、彼を高楼に伴れてのぼりしに、寡婦らみな之をかこみて泣きつつ、ドルカスが偕に居りしほどに製りし下衣・上衣を見せたり。40ペテロ彼等をみな外に出し、

祈るときには、本当に自分と同じ心の人がわきにいることはいいですけれども、そうでない者はじゃまになり、祈りの波動を妨げますから。キリストが特に近親の弟子たちだけをもって祈られたのもそうです。

跪づきて祈りし後、ふりかえり屍体に向かいて『タビタ、起きよ』と言いたれば、

こう言う時の声は、さきほども言いましたように、もう既にこの言葉自身が霊言異言なんです。そうでないような声では響かないですから。

かれ目を開き、ペテロを見て起反れり。41ペテロ手をあたえ、起こして聖徒と寡婦とを呼び、タビタを活きたるままにて見す。42この事ヨッパ中に知られたれば、多くの人、主を信じたり。43ペテロ皮工シモンの家にありて日久しくヨッパに留まれり。

ペテロにしろ、パウロにしろ、使徒たちの現実はこのような信仰の現実であった。

●霊動

今朝、もし私は誘われればＯ君たちと山に早天祈祷にも行きましたけれども、私は部屋

の中で一時間祈っていた。そして、本当にキリストの中に入った。またもの凄い霊動が起きた。私たちは一日のうちいつか本当にキリストに深く接し、そして何ごとにつけ、その瞬間に直ちにその中に入る。どこでも沈黙で

「主さま！」

と祈ること。そうすれば、その「主さま」という声と同時に、何かそこに力が働く。だから、もう何もこわいことはない。それが勉強のことであろうと何であろうと、自動車の運転であろうと何であろうと。私は飛行機に乗ると、多くの人の生命をあずかっているパイロットのために祈ります。そうすると、確信が来る。

話はちょっとずれるけれども、東京湾で2月20日に一遍、飛行機がひっくり返った。そして次の3月20日にまた飛行機がひっくり返った。これはあの東京湾上に、あのひっくり返った飛行機で死んだ人の霊が漂っているわけです。その霊の祭りをしないものだから。そうすると、おもしろいものだね、次に来た同じ日に落ちた。これは幽霊もみんなそうですけれども、同じ時刻に出てくる。そのパイロットが狂うんだね。それでそういうことになる。霊的な現象はよくそういうことが起きるわけです。

何でも、生命が損なわれたら、必ずそのために祈ることです。人間に限らず。昨日もお話したかな、あの呪いの話を。あれも、実はあの家が建てられる時に蛇が梁にからまった。その蛇を殺した。それで祟りがきた。やはり、蛇を殺したら、その蛇の霊を慰めなくてはいけない。あれは霊的な動物ですからね。そういう話はいろいろありますけれども、みな結局、霊を慰めていないと霊がかかってくるわけです、怨霊というやつが。幽霊が出てきたら、

「どうなさいましたか」

というわけで、慰めてやるといい。そしたら、消えていきますから。ちっとも怖がることはない。

●使徒的信仰

御霊の世界というものは、本当に人を愛をもって救っていくことができる。我々の信仰はこの使徒たちと同じ質の、同質の事態にとにかく入っていかなくては。もうそれでなかったら、つまらないですよ、信仰なんて言ったって。そのかわり、これに入ったら、剣道でいえば宮本武蔵みたいなところに入れるんだから、生活のうえで。どうぞ、そういうことで、私たちはこの使徒行伝を本当に身をもって行きましょう。

まぁ、新約聖書は大変なものです。福音書は申すまでもなく、使徒行伝はじかじかに私たちに迫ってくる。使徒的信仰というのは観念で言っているのではないから。私は無教会にいたときは、使徒行伝というものはあまり教えられなかった。というのは、そういう次元の中に先生方はいらっしゃらないから。

私は「日本プロテスタント百年史」の中にも書きましたが、熊本バンド、横浜バンド、

それから札幌バンドの、この三つの焦点から火が発した。そして、プロテスタントが展開を始めた。この京都は正に仏教の本山だからね。ここに今度新しくバトンタッチして、キリスト教が、原始的な使徒的信仰の福音が新しくあなた方を通して、このＯバンドを通して爆発する。そのようにこの京都はこれからいきます。私も時々、応援に参ります。本当に今度の集会もキリスト万歳です。これから祈ります。

●祈り

天のお父さま、私たちの贖い主キリストさま、御霊の神さま。この三日間、あなたご自身がこの破れ器を通して光り出でてくださり、また京都召団をあなたが打って一丸、また友人たちを招き、このようにしてみな心を一つにし、思いを一つにし、信仰を一つにし、あなたを見上げ奉り、キリストを迎え奉り、聖霊をいただきまして、心から御名を讃え奉ります。

私たちの中に、聖書の御言は化体してきました。感謝であります。私たちの中に、

「わが言は霊なり、生命（いのち）なり。光、愛なり」

と、本当になんと聖書は素晴らしいか。私たちはこの福音をおいていずこに行かん。これだけが私たちの唯一の頼るべきところです。

天国は即ち、私たちの周囲に展開していきます。私たち自身が天国体となり、あなたの体となり、スクラムを組んで進んで行きます。求める者、悩める者、苦しめる者、病める者、悲しめる者を、どうぞ、神さま、私たちを通してお救いくださらんことを切に願い奉ります。次第にそのことを成さしめたまえ。

「この恩恵を分け与えずにはあらず、福音を伝えずんば災いなるかな」

と、パウロが言ったとおりであります。本当に地道に一人びとりが本当の意味における伝道者となって進んで行きます。感謝、感謝、御名を讃え奉ります。

またやがてペンテコステがきますが、どうぞ、ここにペンテコステの聖霊の炎がいよいよ燃え上がることができますように。また来るべき夏の集会も、そのようにして、鹿沢において大集会をまた迎えることができますように願い奉ります。……

この望みなき世に本当の望みは上から来ることを、力なき世に本当の力は上から来ることを、光なき世に本当の光は上から来ることを、いよいよ私たちに身をもって示させしめてください。

イエス・キリストさま。パウロさん、ペテロさん、ヨハネさん、ヤコブさんが私たちの本当の友だちです。神さま、どうぞ、この天界の友だちと福音に導かれながら、進んで行きます。……

心からの感謝と讃美と祈りを、兄弟姉妹たちの全身に溢れるそれとともに、イエス・キリストの御名により捧げ奉る。アーメン。